副助詞「ガ」の存在

――「カラガ」「テカラガ」を中心に――

山　田　昌　裕

Existence of an Adverbial-particle “GA”

――Focusing on “KARAGA”“TEKARAGA”――

YAMADA MASAHIRO

要旨

現代日本語における格助詞「ガ」と接続助詞「ガ」を見分ける方法の一つとして，活用語連体形に下接していなければ格助詞，活用語連体形に下接していれば接続助詞という点をあげることができる。しかし実際の助詞「ガ」の使用例の中には，活用語連体形に下接していないものの，格助詞「ガ」とするには躊躇される「ガ」が見られる。例えば「カラガ」「テカラガ」の「ガ」などがそうである。

本稿では，「カラガ」「テカラガ」という表現形式がいつから，どのように拡がったのかについて調査しながら，助詞「ガ」の変容を確認した。そして新たな用法を持つ「ガ」を文法的にどのように位置づけるべきかについて考察した。その結果，「カラガ」「テカラガ」における「ガ」に「強調」という表現効果を示す用法が備わってきたことを確認し，承接のあり方や表現性という観点から，このような「強調」を示す「ガ」を副助詞として認めることの妥当性を主張した。構文的に言えば名詞述語文における「ガ」，統語的にはガ格以外の成分に下接する「ガ」，副助詞に下接する「ガ」などを副助詞と認めることができる。

キーワード：副助詞「ガ」，「カラガ」，「テカラガ」，強調

Keywords： Adverbial-particle “GA”, “KARAGA”, “TEKARAGA”, Emphasis

1．はじめに

現代日本語における助詞「ガ」には格助詞，接続助詞，終助詞があるとされる（方言においては準体助詞（「～のこと」「～のもの」の意）も見られる）。格助詞「ガ」は格表示を機能とし，ガ格名詞句（名詞句と述語の意味関係からすると「ガ」を用いることができる格成分）に下接し，接続助詞「ガ」は活用語連体形に下接する。格助詞と接続助詞を見分ける一つの方法として，活用語連体形に下接しなければ格助詞，活用語連体形に下接していれば接続助詞という点をあげることができる。しかし実際の助詞「ガ」の使用例の中には，活用語連体形には下接していないものの，格助詞「ガ」とするには躊躇される「ガ」が見られる。

① しかし，それにしても，何んと考えることの多過ぎる時代になって来たものだろう。それにも拘らず自分はまだ何も知らぬ。このパリ一つでさえが，眼に触れるもののすべての面に底知れぬ伝統の深さが連なりわたって静まっている。（『旅愁』横光利一）

② いつだって活き活きとしているミーナだけれど，舞台の上でこそが本領発揮だった。（『ブレイブ・ストーリー』宮部みゆき）

③ 「扇骨木が大変奇麗に芽を吹きましたね」
「見事だね。かえって生じいな花よりも，好ござんすよ。ここからは，たった一本しっきゃ見えないね。向へ廻ると刈り込んだのが丸く揃って，そりゃ奇麗」
「あなたの部屋からが一番好く見えるようですね」
（『虞美人草』夏目漱石）

④ 手術して，一年以内に死んだ場合は大損。半年以内ならとんでもない。三年でとんとん。三年過ぎて少し手術を受けた甲斐が出てきて，五年過ぎてからが本当に手術を受けた恩恵が出てくる。
（『このガン切るべきか，切らざるべきか』土屋繁裕）

①は，「このパリ一つでさえ」を述部との意味関係からガ格名詞句として認めるには抵抗があるであろうし，②は「舞台の上で」とあるとおり，「舞台の上」というデ格名詞句に「ガ」が使用されているもので，この「ガ」を

格助詞と認めるわけにいかないであろう。③は，「あなたの部屋から一番好く見える」「あなたの部屋が一番好く見える」のように「から」「が」いずれか一方であれば落ち着くが，「からが」となると助詞「ガ」は格助詞「カラ」に下接しているということになり，この「ガ」は果たして格表示をする格助詞として文法的に位置づけられるものかどうか疑問がわく。また④の「～てから」という従属節に下接している「ガ」は名詞句に下接していないという点で格助詞としては認められないであろう。

本稿では，特に③④のような「カラガ」「テカラガ」に注目する。2節では，「カラガ」「テカラガ」という表現形式がいつから，どのように拡がったのかについて調査しながら，助詞「ガ」の変容を確認する。3節では，「カラガ」「テカラガ」などに見られる助詞「ガ」を文法的にどのように位置づけるべきなのか考察する[1)]。

2．「カラガ」「テカラガ」の拡がり

「カラガ」「テカラガ」という表現形式は管見によれば，平安鎌倉期の散文資料には見られない。そもそも格助詞「カラ」は歴史的には新しい助詞であり，平安鎌倉期には少ない。したがって「カラガ」「テカラガ」という表現形式が平安鎌倉期に見られないということは首肯される。そして「カラガ」が室町期の抄物資料に見られ，その後江戸期には「テカラガ」が見られるようになる。本章では，「カラガ」「テカラガ」の拡がりの様相を確認しながら，「ガ」の変容を追っていく。

2．1　室町期

「カラガ」は室町期以降見られる表現形式であるが，この期に見られる例はいずれも抄物資料においてである。先に述べたように「テカラガ」という形式はこの期に見られない。

⑤　百の爾・君子，徳行を知らず。<ruby>伎<rt>そこな</rt></ruby>はず求めず，何を用てか臧からざらむ。百――こゝ<u>からが</u>女の怨ぞ　（『毛詩抄』 1 p.165）

⑥　築――室を作るとては，まづ廟を作る程に，こゝ<u>からが</u>宮室の事ぞ　（『毛詩抄』 3 p.36）

⑦　那祀成湯――是<u>からが</u>商頌で候ぞ。殷の世の事を作た詩ぞ

（『毛詩抄』 4 p.427）

⑤⑥⑦がこの期に見られるすべての用例であるが，すべて『毛詩抄』であり，特殊な例であったことがうかがえる。『毛詩抄』は抄物であり，中国文献の原文とその訓み下し，及び語句の解釈が示されている資料である。⑤⑥⑦は，いずれも語句の解釈を行っているところであり，原文の漢字を示した上で「これ以降」という起点を示す「カラ」に「ガ」が下接しているものである。特徴としては２点あげられる。上接語が「こゝ」「是」など場所を示すということと，名詞述語文となっているという点である。

ここでの問題点は，格表示をする「カラ」と「ガ」がなぜ承接可能となったかという問題である。これを明らかにするためには，当時の名詞述語文における「カラ」と「ガ」それぞれの様相を見ておく必要がある。

抄物資料においては，⑧～⑪のように起点を示す「カラ」に「ハ」が下接する「～からは（カラハ）～ぞ（ソ）」という名詞述語文が見られ，⑫のように同時期の資料『申楽談義』(1430年）には「ＡからはＢ也」という名詞述語文も見られる。これらは「名詞句＋カラ」全体が主題となっている「ＡハＢダ」型の名詞述語文と考えられる。

⑧　父禮――是からは禮記の昏禮の詞ぞ　（『毛詩抄』 1 p.86）
⑨　禮容――是からは儀の字の注ぞ　（『毛詩抄』 1 p.133）
⑩　先王之――此カラハ祭公謀父カ語ソ　（『史記桃源抄』 1 p.129）
⑪　以秦――此カラハ皆揣摩ノナリソ　（『史記桃源抄』 3 p.155）
⑫　「嵐に類う松が枝は，をのれと琴を調べて」，「嵐に類う」までは，責めて，角の聲なれば，曲舞節なり。「松が枝」からは，女節也。
（『能楽論集』 p.544）

平安鎌倉期には，⑧～⑫のような名詞述語文における「カラ」の使用は見られない。この期になって「カラ」が名詞述語文において使われるようになったことは注目すべきであろう[2)]。

次に名詞述語文における「ガ」，つまり「ＡガＢダ」型に関してであるが，山田（2010）によれば，「ＡゾＢダ」型，「ＡコソＢダ」型と交替するようにして16世紀以降かなり拡がってきているという（pp.61～62)。「ＡガＢダ」

型の名詞述語文が「ＡゾＢダ」型，「ＡコソＢダ」型と交替するように発達拡大したとなれば，名詞述語文における「ガ」は「ゾ」「コソ」の表現性を引き継いでいるものと考えられる。「ガ」は単に格関係を示す格助詞とは違い，何らかの表現効果をもたらすものであったと言える。ここではこの表現効果を「強調」としておきたい（「強調」という用語は実は非常に抽象的で曖昧なものであるが，ここではプロミネンスと同等の効果を示すものとして考えている）。いわゆる題述文「ＡハＢダ」型が無標であるのに対し「ＡガＢダ」型が有標であると考えられるのは，ここに起因するものであろう。

では，「カラ」と「ガ」がなぜ承接可能となったのか。すでに室町期には「ＡカラハＢダ」という名詞述語文が存在した。これは「ＡハＢダ」型と同様無標であったと考えられる。室町期における「ＡハＢダ」型の名詞述語文と「ＡガＢダ」型の名詞述語文の並存は，無標有標の関係として理解されていると考えられることから，無標である名詞述語文を有標の名詞述語文に変えるには「ハ」の代わりに「ガ」を用いればよいという意識はあったであろう。つまり「ＡカラハＢダ」を有標の名詞述語文にするためには，「ハ」を「ガ」に代えればよい。このような経緯で「ＡカラガＢダ」という名詞述語文が生まれ，「カラ」と「ガ」が承接することになったのではないかと考える。

以上のように考えることによって，「カラガ」という形式が名詞述語文という環境においてのみ見られるということの説明が可能になるであろう。

２．２　江戸期

２．２．１　「カラガ」拡大の様相

室町期に発生したと思われる「ＡカラガＢダ」型の特徴として，上接語が「こゝ」「是」など場所を示すということと，名詞述語文になっているという２点があげられた。江戸期においては，上接語の「是」は，起点となる場所を示す「是」だけではなく，時（今）を示す「是」も見られるようになる。また「是」以外の上接語や名詞述語文以外においても「カラガ」の使用が見られ，「カラガ」の使用拡大がみてとれる。

⑬　心得ておちやる。まづ。ぢとうどのへ。ゆくやうにして見たがよい。まつ。こゝが門よと。これからが番所。はあ。れき〳〵の。御ばんで御ざりまする。訴訟の者で。御ざりまする　（『狂言記』p.206）

⑭　「あの道行ハ，鎌倉から京登りの道中でござります。右のびんからが東海道，左のびんからが中仙道，真中のわげがふじ山のかたちでござります」（『噺本』13p.305）

⑮　扨是からが首締めの習ひ事。よふ見よふぞや。此喉の佛様を。かうぐっと締め付て。アイタヽヽヽアヽいかふじゅつないものじゃ
（『浄瑠璃集 上』p.250）。

⑯　「今からがこの揚巻が悪たいの初音。意休さんと助六さんを，かふマア並べて見た所が，こちらは立派な男振，こちらは意地のわるさうな男つき，譬へて見やうなら，雪と墨，硯の海も鳴門の海も，うみといふ字にふたつはなけれど，深いと淺いが間夫と客。間夫が無ければ女郎は黒暗。くらがりで見ても，助六さんと意休さんを取違へてよいものかいなア」
（『歌舞伎十八番集』p.91）

⑰　「費といふは，金を遣ふなどいふ示しではござらぬ。こなたの聞やうな費の事なれば，色里へによつと足踏込むからが，費でござる。さふした譯ではおりない。無駄遣いとて女郎も宿屋も，悦ばぬ金を捨て給ふなといふ事也」　（『浮世草子集』p.355）

⑬～⑰はすべて名詞述語文である。⑬⑭のような例は他にも見られるが，ここにおける「～カラ」は起点となる場所を示すもので，室町期の用法を引き継ぐものである。⑮⑯⑰の「是から」「今から」「踏込むから」はそれぞれ主語名詞句相当の振る舞いをしていると見なせるが，ここにおける「～カラ」は時を示す語句であり，江戸期から見られる新しい名詞述語文である。このような名詞述語文もこの期には多く見られるようになる。

いずれにしても⑬～⑰の「ガ」は，「ＡガＢダ」型の名詞述語文における「ガ」と同様，やはり「強調」という表現効果を担っていると思われる。

⑱　乳母「オホホホホ，眞に左様で御座います。私の様になつてはいけませんが，御新造さんなどはこれからが，肝心で御座います」
（『仮名文章娘節用』p.357）

⑲　「お前は結構なお氣じやなア。是程詰まらぬ事をいふておこすのんぴんを，『人にとやかく言はすが聞苦しい』の『腹が立つ』のと，まだ勞ふやうな事をおつしやる。揚屋迄もない私からがいはずにゐませふか。人

の皮被つた者の今時分こんな事いふて歩かすものではござらぬ」
（『浮世草子集』p.335）

⑱は形容詞述語文，⑲は動詞述語文となっている。名詞述語文以外での「カラガ」の使用は，江戸期の資料においてはこの２例のみである。

⑱の「これから」は「以後，今後」の意で，この期にはすでに一語化している語である。「これから」という名詞が「ガ」によって形容詞述語「肝心だ」の対象であることが示されており，この場合の「ガ」は格表示機能を担っているとみなせる。したがってここにおける「ガ」は格助詞と考えられるであろう。しかし，一方で，「これから」が副詞成分として機能しており，「これから肝心で御座います」という表現において，この副詞成分に「ガ」が付加されたものとして考えるならば，この「ガ」は格表示ではなくなる。格表示ではない「ガ」が付加されたならば，「強調」という表現効果を担っているとも考えられる。文脈を考えてみても，「これまでよりも今後のほうが肝心である」という解釈が成り立つ。こうして見ると，⑱の「ガ」は格表示でもあり，「強調」でもあるということになるであろう。

⑲は「ガ」の変容を示す重要な例である。⑲の「私から」全体を名詞句相当とは認めることはできない。動詞述語文であるため，「カラ」は「言ふ」との関係において「私」という動作主を示すことになるからである。同様に「ガ」も「言ふ」との関係において動作主を示すものであり，現代語においてはこのような場合に「カラ」と「ガ」を承接させることはない。なぜこのような「カラ」と「ガ」が承接しているのだろうか。

「ガ」は「言ふ」との関係性においては動作主を示す格助詞という見方もできるが，同じく動作主を示す「カラ」と共起しているという点からすると，「ガ」には別の機能が担わされていると考えることができるであろう。それがすなわち「強調」という表現効果である。文脈上でも「他でもない私から」ということがうかがわれる場面である。もちろん動作主に下接しているという点では格表示ということもありうるであろうが，単なる格表示以上の何かがここには発揮されていると考えることができる。

⑳　漸々起あがり，をれがかふあろとおもふて粟田口といふたに。小ぜきは常<u>からが</u>用心のわるひところじやと云た　（『噺本』８p.57）

⑳は「小ぜきは用心のわるいところだ」という名詞述語文であり，「常から」は名詞述語文の成立には直接関わっていない。「常から」は「常＋カラ」であり，ここでは「用心のわるい」にかかる副詞成分として機能していると考えられる。この副詞成分に下接する「ガ」は主語名詞句を表示しているとは考えられない。では一体何のために「ガ」が付加されているのかといえば，「強調」という表現効果のために付加されているということになるであろう。格表示のための「ガ」の使用ではないため，より鮮明に「強調」という機能が浮かび上がってくる。

先の⑱においても，「ガ」が副詞成分に下接して，これを「強調」していると考えることができた。このようなガ格ではない成分に下接する「ガ」として次のような例が見られる。

㉑　（主）いや此川は，かみがふつたやらことの外水がでたよ，（太郎冠者）誠にいかう水がでゝ御ざる，（主）いそひでわたらふほどに，なんじはせぶみをせひ，あさひ所をわたらふ　（『虎明本狂言』中p.92）

㉒　いつもの御だんなしうで御ざるに，わるひ酒をしんじては，以来がうられませぬに依て申，ようできた時かさねて御さう申さう程に，かならずなまいつて下されそ　（『虎明本狂言』中p.252）

㉑は「川上で雨が降ったのか，ずいぶん水量が多い」という文脈であり，「かみ」はガ格成分とはならない。㉒は「わるい酒をさしあげては，これから先，酒を売ることができなくなる」という文脈であり，やはり「以来」はガ格成分にはならない。ガ格ではない成分になぜ「ガ」が付加されたのかと考えるとき，やはり「ガ」の表現効果としての「強調」を認めざるをえないであろう。

⑳㉑㉒のようなガ格ではない成分に下接する「ガ」の存在は，「ガ」という助詞自体に「強調」という表現効果を出す機能が備わっていることの証左となるであろう。

２．２．２　「テカラガ」

「テカラガ」は江戸期から見られる表現形式である。㉓㉔のように抄物資

料にはすでに多くの「テカラ」は見られるが，「テカラガ」は江戸期にならないと見られない。

㉓　妾はほしみへてから行て，ほしのみゆる時蹄るぞ（『毛詩抄』 1 p.110）
㉔　生レ落テカラ奇特ナソ（『史記桃源抄』 1 p.58）

「テカラガ」は「テカラ」に「ガ」が下接することによって生じた形式であると考えられる。「カラ」に「ガ」が下接した「カラガ」という形式が前代から存在し，この「カラガ」という語列の存在に引きずられて「テカラ」に「ガ」を添えることにつながったのであろう。

㉕　田がくとハどうするものと申ましたれバ，まづ豆腐をたんざくに切れとおつしやる。たんざくとハと申たれバ，細く四角に切ることだとおつしやりましたゆゑ，焼ぬときがたんざくといひ，焼てからが田がくといふとハ存ましたれど，生でハうりませぬゆゑ，焼たたんざくを買て参りましたといへバ（『噺本』14p.186）
㉖　芝ゐもの◇そのけをぬいてござりませぬか△◇はな◇めつそふな。ちつとばかりでハなし，それをいち〳〵ぬかれるものか。ぬかれてからが，五日や十日でハぬきつくされまい（『噺本』18p.104）
㉗　サテ，夜さり戻つてからが，こちの人待て居たはいなト，云て呉る嚊もなけりやナ，爺さん戻らんしたか，ト云ふものもないはい（『浮世風呂』p.271）
㉘　大夫殿のおねがひてござります。正月をなされて進ぜられませぬか。なるほどこゝろへたが，正月ハひまがない。正月してやつてからが，こぬ日ハおかしからぬことじや。ゆるしてたも（『噺本』 7 p.266）

㉕～㉘は，それぞれ「焼てから」「ぬかれてから」「戻つてから」「正月してやつてから」というテカラ節に「ガ」が付加されたものである。このような例は江戸期には他にも見られる。「ガ」が名詞句ではなく従属節に下接するようになったということは，これまでの「ガ」には見られない大きな変化である。これまでの「ガ」が下接する成分は，たとえ文中においては副詞成分であったとしても，少なくとも体言としての性質を持っている（とみなせ

る）成分であった。先に見たように，ガ格ではない成分に下接する「ガ」の機能としては，「強調」という表現効果が認められたが，格成分とならないテカラ節に「ガ」が下接できるようになったのは，江戸期になって「強調」という表現効果をもたらす用法が「ガ」の用法として定着してきたことを示唆するであろう[3)]。

㉙　是井のもとゝ呼こみ，かう〳〵した訳じや。上てくれと，息子がほろ〳〵涙て頼めは，心得ました。先様子を見よふと井戸をのぞひて，扨も深い井戸じや。棒組。何ぼがよかろふなあ。サレバ生ものといひ，安けれど先五貫かい。それでからが余り望む仕事じやないといへば，息子が，それハあまり足もとを見た直段じや。高けれど親の事じや。壱貫で頼むといふ　（『噺本』 8 p.328）

㉚　亭主，されバ八味の地黄丸，あまりにうれぬゆへ，五味がかゝつて十三味なり。そんなら其そばに，万病円とあるが，やまひハ四百四病はかない。万やまひが有かと尋けれバ，されバ，疝気とて千も有といふ。それでからが千四百四病じや。張満とて，ちやうど万ごさるといふた　（『噺本』 8 p.246）

㉙㉚は「テカラガ」の例ではないが，「ガ」の特徴を示すものとしてここで扱う。

「それでからが」はある種の慣用句であると思われる。㉙は「井戸から人（親）を引き上げる報酬として，安いとは思うけれどとりあえず五貫というところか，それにしてもあまり望んでする仕事じゃない」という文脈，㉚は「万病円とあるが病気には四百四種の病気しかない。万の病気があるのかと尋ねると，疝気といって千もあると答える。それにしても千四百四種の病気だ」という文脈で，「それでからが」はいずれも「それにしても」の意と考えられる。

「それでからが」は一語化したものと思われるが，ここでの「ガ」は格表示とは何ら関係することがない。名詞述語文であるということで「カラガ」から派生したと考えることもできるが，いずれにしても「ガ」の「強調」という表現効果が前面に出るようになったことから発生した表現形式であると思われる。

２．３　明治大正期

２．３．１　「カラガ」

この期に入っても「カラガ」形式は名詞述語文における使用が多いが，形容詞述語文，動詞述語文における「カラガ」形式の使用も多く見られるようになる。

㉛㉜は前代の用法を踏襲する名詞述語文の例である。㉝㉞は動詞述語文となっているが，それぞれの述部は名詞句相当としての振る舞いをしており，名詞述語文と同等であると思われる例である。

㉛　警官らはこれからが仕事だといって騒いでいる　（『去年』伊藤左千夫）

㉜　さあ，是からが本文だが，此処らで回を改めたが好かろうと思う
（『平凡』二葉亭四迷）

㉝　それを横に睨んで河岸端へ出ると濡れに濡れた河端柳が案内顔にさし招く。此處からが停車場前になるのだ（「夏の新橋駅」秋雨『女学世界』）

㉞　若槻と濱口は頗る宜しいが，黨人としては少々物足りない。其の次に來る安達とか藤澤とか下岡とか，此の邊からが一寸話せると云ふ事になる。其の一寸話せる中の安達が，前に話した位の人物ぢや。
（「政界の表裏　外交調査会消息」無名隠士『太陽』）

㉝の「こゝからが停車場前になる」は「ここからが停車場前である」という意味と同等であり，また㉞の「此の邊からが一寸話せると云ふ事になる」は「此の邊からが一寸話せる（人物である）と云ふ事になる」のような解釈ができる。つまり，述部は形式的には動詞述語であるが，意味内容としては「停車場前である」「一寸話せる人物である」ということであり，述部が名詞句相当の振る舞いをしていると考えられる。

したがって，㉛～㉞において見られる「ガ」もやはり「強調」として用いられていると考えられる。

㉟　「扇骨木が大変奇麗に芽を吹きましたね」
「見事だね。かえって生じいな花よりも，好ござんすよ。ここからは，たった一本しっきゃ見えないね。向へ廻ると刈り込んだのが丸く揃っ

て，そりゃ奇麗」
「あなたの部屋からが一番好く見えるようですね」
「ああ，御覧かい」　（『虞美人草』夏目漱石）

㊱　向こうところに敵なくして剣の力で信仰と権勢を植え付けて行った半生の歴史はそれほど私の頭に今残っていないが，全盛の頂上から一時に墜落してロシアに逃げ延び，再びわずかな烏合の衆を引き連れてノルウェーへ攻め込むあたりからがなんとなく心にしみている
（『春寒』寺田寅彦）

㊲　「いずれも立派な方々からだな。……ところで松本伊豆守様からが，一番注文が多いようだが，この頃にご注文があったかな？」
（『十二神貝十郎手柄話』国枝史郎）

㉟㊱㊲は動詞述語文，形容詞述語文となっている例である。それぞれ「ガ」を除いて，「部屋から一番好く見える」「攻め込むあたりから心にしみている」「松本伊豆守様から注文が多い」としても文は成立する。それにも関わらず，ここに「ガ」が付加されているのは，文脈上，上接語が「強調」に値する要素となっているからであると思われる。㉟㊱㊲は複数の候補から一つを選択するという文脈である。㉟は「一番好く」とあるとおり，複数の部屋の中から「あなたの部屋」を選択するという文脈，㉟は，他のところは頭に残っていないが，「全盛の頂上から一時に墜落してロシアに逃げ延び，再びわずかな烏合の衆を引き連れてノルウェーへ攻め込むあたり」は覚えているという文脈，㊲は，「一番注文が多い」とあるとおり，「立派な方々」の中から「松本伊豆守様」を選択するという文脈である。

いずれの例も，選択を受ける要素に「ガ」を用いることによって，複数の中から選ばれたという「強調」をしているものと考えられる。

㊳　『八犬伝』もまた初めは写したに相違ないが，前数作よりも一層感嘆措かなかったので四，五輯頃から刊本で揃えて置く気になったのであろう。それからが出版の都度々々届けさしたので，初めの分はアトから補ったのであろう　（『八犬伝談余』内田魯庵）

㊴　此の敵城あることをば某も存ぜず候間に，先手の者ども，はや攻落して候，と空嘯いて片付けて置いて，扨それからが反対に政宗の言葉に棒を

刺して拗って居る　（『蒲生氏郷』幸田露伴）

㊵　それまでは，今までとすこしも変わらないだろう。だが，それからが変わるだろう　（『海に生くる人々』葉山嘉樹）

㊳㊴㊵の「それから」はすでに一語化しており，「（前の出来事があって）続いて」の意で，「カラガ」の例としては扱えないが，先の⑳の「常から」と同様，「ガ」の「強調」という表現効果を示す例であると思われるのであげておく。いずれも「ガ」を除いて，「それから届けさした」「それから棒を刺して拗って居る」「それから変わるだろう」としてもよいところに，「強調」の「ガ」が使用されていると考えられる。

江戸期には僅少であった形容詞述語文，動詞述語文における「カラガ」が明治大正期にかなり拡がりを見せている。格表示を中心的な機能としていた「ガ」が，「強調」という表現効果を示すためにも広く使われるようになってきたということがうかがえる。

2．3．2　「テカラガ」

「テカラガ」も明治大正期に入って，かなり使われるようになってきている（青空文庫コーパスでは約250例見られる）。このことからも格表示を中心的な機能としていた「ガ」が，「強調」という表現効果を示すために広く使われるようになっているということがうかがわれる。

㊶　「それからどうなさいました」と今度は細君の方から催促する。「それから明朝あくるあさになって眼を覚さましてからが失恋でさあ」「どうかなさったんですか」　（『吾輩は猫である』夏目漱石）

㊷　實に大論に言つてある通り，此のチラ〳〵チラ〳〵する心は，恰も風の中の燈の如くで，たとへ聰明な資質を抱いて居る人にしてからが，さういふ心では，何に對つても十二分にうまく仕事は出來ぬ（『努力論』幸田露伴）

㊸　よしや家督をうけつぎてからが親類縁者の干渉きびしければ，我が思ふ事に一錢の融通も叶ふまじく　（『ゆく雲』樋口一葉）

㊹　今では假令出役が貴様へ戻さうといはれてからが，内儀が離れることではない　（『新袈裟物語』宮崎三昧）

3　「ガ」の文法的位置づけ

「ガ」は格関係を表示する格助詞とされるが，「カラガ」や「テカラガ」の動向に注目してみると，かなり「強調」表示という機能を強めてきたことがうかがえた。

さて，このような新しい機能を担うようになった「ガ」をどのように文法的に位置づけることができるであろうか。格表示をしつつも「強調」という表現効果ももたらすということであれば，そのまま格助詞として認めてもよいであろう。しかし，実際にはカラ格名詞句やデ格名詞句などにも下接し，あるいは格成分とは見なせない副詞成分にも下接することが明らかとなった。このようなガ格表示をしない「ガ」に対しては，格助詞というカテゴリーに入れるよりも，他のカテゴリーに属するものと考えた方がよいであろう。

可能性としては日本語文法の中で用いられている６分類のいずれかに分類するか，または新たにカテゴリーを立てるかとなる。結論を先取りしてしまえば，このようなガ格表示をしない，「強調」という表現効果のための「ガ」は副助詞に分類できるものと考える。

３．１　副助詞「ガ」の妥当性

３．１．１　各成分との承接

「強調」の「ガ」の中にはカラ格名詞句やデ格名詞句に下接するものがあった（例②⑲㉟㊱㊲）。また副詞成分に下接するものもあった（例⑳㉑㉒㊳㊴㊵）。このような「ガ」の振る舞いは，例えば「舞台の上でのみ」「私からだけ」「部屋からさえ」や，「それからでも」「それからしか」など副助詞一般に見られるものである。また「強調」の「ガ」はテカラ節にも下接したが，例えば「体が疲れ始めてからのみ」「焼いてからだけ」「戻ってからさえ」のように，副助詞も従属節に下接することができる。このように各成分に対する「ガ」の承接のあり方は副助詞と共通するものであり，「ガ」を副助詞に位置づける妥当性を見出すことができる。

３．１．２　副助詞との承接における「ガ」

「ガ」は格表示の機能を持つ格助詞であると言われるが，副助詞との承接

においては他の格助詞と異なる振る舞いを見せる。そしてその振る舞いは，あるカテゴリーに属する副助詞と共通するものである。こうした点からも「ガ」を副助詞に位置づける妥当性が見出せる。

副助詞は，格助詞との承接関係によって大きく２種にわけることができる[4)]。格助詞の前後に承接可能なもの（ノミ，バカリ，ダケ，ナド，ナンカ）と，格助詞に後接するもの（クライ，サエ，マデ，コソ，ハ，モ，デモ，スラ，シカ，ナンテ，ダッテ）である。

㊺　この薬（○のみで／○でのみ）治る。
　　うちの子はいつもあの子（○ばかりと／○とばかり）遊んでいる。
　　あなた（○だけに／○にだけ）話す。
　　自然がないところ（○などへ／○へなど）行きたくない。
　　学歴（○なんかで／○でなんか）人を判断できない。
㊻　せめて家族（×くらいに／○にくらい）相談した方がよい。
　　近所の人（×さえと／○とさえ）挨拶をしない。
　　後輩（×までに／○にまで）先を越されてしまった。
　　困難な局面（×こそで／○でこそ）真価が問われる。

しかし，副助詞と「ガ」の承接のあり方は他の格助詞とは異なる。すなわち「ガ」に前接するもの（ノミ，バカリ，ダケ，ナド，ナンカ，クライ，サエ，スラ，マデ，コソ）と，「ガ」とは承接しないもの（ハ，モ，デモ，シカ，ナンテ，ダッテ）である。これらのことを表にまとめると以下の通りである。【表１】

【表１】	副助詞	「ガ」との承接
A類	バカリ，ノミ，ダケ，ナド，ナンカ クライ，サエ，スラ，マデ，コソ	「ガ」が後接
B類	ハ，モ，デモ，シカ，ナンテ ダッテ	

ここでB類とした副助詞の特徴としては２点あげられる。１つは，A類の副助詞と承接する場合には原則として後接するという点（例㊼㊽㊾），１つは，B類の副助詞同士は承接しないという点である。

㊼　「ヤ，怪しからぬことを云ふ，釜ばかりでもお前十五両で買うたのだぜ」
（『士族の商法』三遊亭円朝）

㊽　ロンドンからの便りでは，新聞や通俗雑誌くらいしか売っていない店先にも，ちゃんとアインシュタインの著書（英訳）だけは並べてあるそうである　（『アインシュタインの教育観』寺田寅彦）

㊾　「気味悪い家になっている。でも鬼なんかだって私だけはどうともしなかろう」　（『源氏物語　夕顔』与謝野晶子訳）

実はこの２点の特徴は，副助詞に承接する「ガ」にも見られるものである。【表１】で確認したとおり，「ガ」はＡ類の副助詞に承接する場合には必ず後接する。また「ガ」はＢ類の副助詞とは承接しない。つまり副助詞に承接する場合の「ガ」はＢ類の副助詞と同様の振る舞いをするわけである。このような言語実態から，「ガ」をＢ類の副助詞として認めるという妥当性が見えてくる。①②で示した「ガ」などがこれに該当するであろう。

３．２　〈副助詞＋ガ〉における「ガ」の表現性

「ガ」と副助詞との承接のあり方から，「ガ」をＢ類の副助詞と位置づけることが妥当であることを確認したが，この場合の「ガ」の表現効果はどのようなものであろうか。

山田（2011）では，「副助詞＋ゾ，コソ」から「副助詞＋ガ」への移行の検証をこころみている。それによると，「バカリガ」「ノミガ」の発生は，「バカリゾ，ノミゾ」→「バカリコソ，ノミコソ」→「バカリガ，ノミガ」という過程を経たことが示されている。〈副助詞＋ガ〉の源流は〈副助詞＋ゾ，コソ〉であり，「ガ」が「ゾ」「コソ」の表現性を引き継いでいることがということがうかがわれる。つまり副助詞に下接する「ガ」には「強調」という表現効果があると見られるのである。

２節において見られた「強調」を示す「ガ」と，副助詞に下接する「ガ」とは，係助詞「ゾ」「コソ」の表現性を引き継いでいるという点で同等であると言えるわけである。表現性という点からも「強調」を示す「ガ」を副助詞とすることの妥当性を見出せるであろう。

4　まとめ

本稿では，「カラガ」「テカラガ」という表現形式に注目することによって，「ガ」に「強調」という表現効果を示す用法が備わってきたことを確認した。そして承接のあり方や表現性という観点から，「強調」を示す「ガ」を副助詞として認めることの妥当性を確認した。構文的に言えば名詞述語文における「ガ」，統語的にはガ格以外の成分に下接する「ガ」，副助詞に下接する「ガ」などを副助詞と認めることができる。

注

1）本稿では以下の資料を参照した。引用の際には各資料名と頁数を示す。ただし『日本古典文学大系』の場合は巻名と頁数，『噺本大系』の場合は『噺本』と略称し，巻数と頁数を示す。

【平安期～江戸期】

「大系本文（日本古典文学・噺本）データベース」（国文学研究資料館）

【平安期】

『今鏡　本文及び総索引』（笠間書院）『古本説話集総索引』（風間書房）

【鎌倉期】

『鎌倉時代物語集成』第１巻～第７巻『東関紀行　本文及び総索引』『十六夜日記　校本及び総索引』『うたゝね　本文および索引』『閑居友　本文及び総索引』『十訓抄　本文と索引』『水鏡　本文及び総索引』『とはずがたり総索引（本文編）』（以上，笠間書院）

『宮内廳書陵部蔵本　寶物集総索引』（汲古書院）

【南北朝室町期】

『史記桃源抄の研究（本文篇）』第１巻～第５巻，亀井孝・水沢利忠（日本学術振興会）

『毛詩抄　詩経』第１巻～第４巻，倉石武四郎・小川環樹校訂（岩波書店）

『応永二十七年本　論語抄』中田祝夫（勉誠社）

『湯山聯句抄本文と総索引』『中興禅林風月集抄』『エソポのハブラス　本文と総索引』（以上，清文堂）

『天草版平家物語対照本文及び総索引』江口正弘（明治書院）

【江戸期】

『大蔵虎明本狂言集の研究　本文篇（上中下）』（但し，巻８は除く）（表現社）

「虎清本狂言」『近代語研究３』（武蔵野書院）

『狂言記の研究』（勉誠社）

「人情本パッケージ」（国立国語研究所）

【明治大正期】

「太陽コーパス」（博文館新社）

「近代女性雑誌コーパス」（国立国語研究所）

「青空文庫パッケージ」（国立国語研究所）

【現代】

「書き言葉均衡コーパス」（国立国語研究所）

２）管見によれば「ＡカラハＢダ」形式の名詞述語文は平安鎌倉期には見られない。類似表現として「ＡヨリハＢダ」形式の名詞述語文が１例のみ見られる。

からうじて，越えいでて，關山にとゞまりぬ。これよりは駿河也

（『更級日記』p.486）

「ＡヨリハＢダ」形式の名詞述語文は，文脈上，平安鎌倉期に見られないのか，それともそもそもこのような構文が好まれなかったのか明らかではないが，場所を起点とするような「ＡカラハＢダ」や「ＡカラガＢダ」形式の表現はある特定の分野において発生した可能性がある。

３）以下の例は，テカラ節を強調するものと考えられるが，江戸期には「テカラコソ」という形式は見られない。これを引き継いだ形式が「テカラガ」ではないかと思われる。

武帝ノ大初元年ニ至テカラコソ，――（中略）――トテ，始メテ今ノ正月ヲ，歳首トセラレタソ　（『史記桃源抄』２p.39）

４）実際には実態はそれほど単純ではない。どの格助詞とどの副助詞が承接するのか，個別の様相を呈する。ここではある程度内省に基づいて抽象化している。しかしながら以下の論旨に影響を与えるものではない。

参考文献

山田昌裕（2010）『格助詞「ガ」の通時的研究』ひつじ書房

山田昌裕（2011）「「副助詞ガ」形式の成立と「ガ」の位置づけ」『日本語学会2011年度秋季大会予稿集』